



TITLE:

京大広報 No. 145

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 145. 京大広報 1977, 145: 686-689

ISSUE DATE:

1977-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209545>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 145

京都大学広報委員会



オリンピック・オーク（農学部グラウンド北西部）
1936年ベルリン・オリンピックでの三段跳び優勝者田島直人氏が持参した記念樹

目 次

附属病院にコンピュータ・システム導入 2

<紹介>

農学部附属・農業簿記研究施設 3

<随想>

オリンピック・オーク

名誉教授 片 桐 英 郎 4

附属病院にコンピュータ・システム導入

導入の目的と経緯

本院ではこれまで医療情報の転記、集計、計算などは主として人力を用いて実施して来たが、既に飽和状態にあり、今後ますます増大する医療情報をより効率的、多面的に利用するには、機械力の助けを借りなければ十分な医療が実施し得ない状況になった。

このような状況から、本院においては早くから各種委員会において電子計算機の導入を検討し、今回第一次計画として外来部門システムを中心としたコンピュータ・システムの導入を昭和52年1月から行なった。システム導入に関する主な委員会、プロジェクトチームは次のとおりである。

病歴システム化委員会 (48.1~49.8)、医事システム委員会 (49.8~)、機種選定委員会 (50.9~51.7)、病院プロジェクトチーム (51.6~)、各科各部指導者連絡委員会 (51.6~)、事務部電算機導入プロジェクトチーム (50.10~52.3)、検査部電算機導入プロジェクトチーム (51.6~)、薬剤部電算機導入プロジェクトチーム (51.6~)、医事課における検討 (51.9~)。

各種委員会は職員各層から構成され実質的な検討がなされてきた。現在までに決定された電算機導入に関する本院の方針を要約すると以下のとおりである。



1 目的

病院情報の有効かつ多面的な共同利用によるよりよい医療

2 利用形態

イ 病院トータルシステムを指向するがサブシ

ステムから順次構成していく。医療事務（受付から保険請求まで）だけでなくデータベースの共同利用を目指し従来各科独自の診療番号制を廃止し一患者一番号制（生涯不変番号）を採用。

ロ 使用者側に立って問題を解決していく使い方。そのためにプログラムを自力で開発し、簡単な言語、プログラミングの容易さという点でマンプス (Massachusetts General Hospital Utility Multi Programming System) 言語を採用した。

ハ ミニコンで院内計算機網を構成して複合体により大型の機能を実現させる。

ニ 分散処理システムで多端末、T.S.S., 超高速化を図る。

ホ 汎用端末で使い易さと融通性をもたせる。

ヘ 患者の医療情報を保護する。(プログラム固定端末方式により使用プログラムを限定する。非公開の UCI (使用者識別コード) によるデータアクセス。非公開の PAC (プログラム識別コード) によるプログラム利用。データ保護委員会が病歴に関する利用をチェックする。バックアップシステム使用によるデータの分散管理。)

以上の利用形態により現在までに開発されている業務は以下のとおりである。

1 事務部

- イ 受付業務 (診療番号発行, カルテ検索, 診療目的入力, 保険情報入力)
- ロ 会計業務 (診療内容入力, 薬価計算, レセプト出力)
- ハ 統計業務 (外来各種統計)
- ニ 医薬品購入資料作成

2 診療科

- イ 一患者一番号によるカルテ管理
- ロ 病名記載リスト

3 薬剤部

- イ 薬袋ラベル発行
- ロ 医薬品情報ライブラリ

4 検査部

- イ 検体ラベル発行
- ロ ワークシート

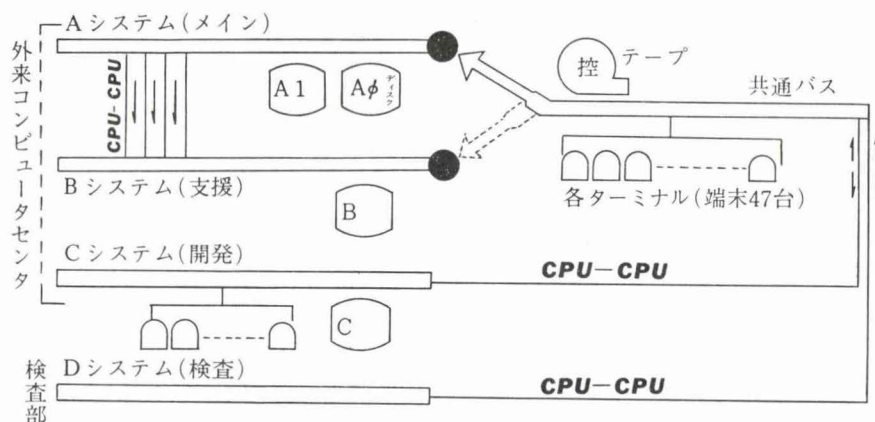
5 看護部

- イ エンボスされた診療カードによる諸伝票のインプリント
- ロ 一患者一番号による医療情報の検索

システムの概要

A, B, C, D 4 台のミニコンピュータのネットワークによる多重同時処理方法である。

京大病院医療情報処理ネットワークシステム概要



今後の方向と問題点

現在 A システム 47 台, B 5 台, C 6 台, D 2 台の端末が稼動しており, 事務部, 診療科, 薬剤部, 検査部, 看護部等がそれぞれの目的をもって医療情報を電算機に向くようコンバージョンし患者サービスに努力している。

特に第一次計画で稼動している医事事務に関しては複雑多岐化し膨大な業務量をかかえた担当職

員の並々ならぬ努力と熱意によって推進されている。今や電算機は情報の解析や速かな伝達の方法として利用されようとしており, 従来不十分といわれてきた医事事務における社会保険等の業務, 医療統計, 患者サービス等の向上にも期待がもてる。そのためにも入院システム, 検査システム, 薬剤システム, 病歴管理システムの早期導入が課題となっている。(医学部附属病院)

< 紹 介 >

農学部附属・農業簿記研究施設

本研究施設は, 昭和 33 年に設置されている。しかし, その歴史は, 京都大学農学部の新設とともに始まっているといつてよい。農学部の農林経済学科創設にあたって, 農家および農村の調査に基づく実証的研究が重視され, とくに農家経済の実態に合った農業簿記の開発と農家による記帳結果の分析が試みられた。そのための機関として, 農村経済調査室が組織されたのである。

その後, この調査室における理論的・実証的研究の成果ならびにそれらに関する教育活動は, 学界だけでなく, 実務面でも高く評価されるようになったのである。

本研究施設は設置当初, 「農業簿記」部門だけであったが, 昭和 40 年に「農家経済分析」部門が増設されて, 現在, 専任教官 5 名, 併任教官 7 名, 事務官 4 名によって運営されている。

専任教官は, 農業簿記, 農家経済分析のほかは農業の社会会計, 農業情報, 農業協同組織の会計, 農業評価などの研究分野において成果をあげている。また教育については, 大学院学生および学部学生の講義と演習を担当し, 本研究施設の研究部門を専攻する大学院学生の直接指導にあたっている。

さらに, 研修員や農業改良普及員受託研修生などを受入れて, 教育と指導にあたっている。そのほか, 国立学校公開講座の一環として, 毎夏, 「農業簿記・農業経営講習会」を開催している。今年度は第 41 回目にあたり, 農業界ではこれを殺

